

研究主題 命を大切にできる子どもを育む道徳教育の在り方  
～かかわり合いの中から自分を見つめ、生き方を考える活動を通して～

日進市立日進東中学校

### 1 主題設定の理由

本校は、愛知県教育委員会より一年間の研究委嘱を受け、平成25年4月から「命を大切にできる子どもを育む道徳教育の在り方」に取り組んできた。

現在の社会においては、核家族化が進み、地域社会の結びつきが弱まる中で、子どもたちの生活体験や人とのかかわりが減少し、様々な問題が起きている。そこで本校は、身近な家族や学校・地域社会など様々な他者とのつながりや体験活動を大切にすることで、生徒の自他の生命を尊重する心を育成し、道徳教育の一層の拡充を目指した。

また、人とのかかわりや体験活動を通して自分を見つめさせ、自己の生き方について考えを深めさせることが、「命を大切にできる」ことにつながると考え、副題を「かかわり合いの中から自分を見つめ、生き方を考える活動を通して」とした。

### 2 研究の仮説

人とのかかわり合いの中から自分を見つめ直すことが、命を大切にすることにつながると考えて主題を設定した。「人とのかかわり合い」の中でも特に、「感謝したこと」と「感謝されたこと」を見つめることが他人や自己を認めることにつながり、そして、人間としての在り方や生き方などについて互いに学び合える適切な資料を選択・活用することが、自己を見つめなおす良いきっかけとなるのではないかと考え、次のような仮説を設定した。

他人に対する感謝の気持ちや他人から感謝されたことを見つめ直すことにより、生徒は他人や自己を認め、大切に思うようになるのではないかと考え、次のような仮説を設定した。

人間としての在り方や生き方などについて互いに学び合える適切な資料を選択・活用することにより、自分の体験と結びつけ、生徒は自己を見つめなおすことができるのではないかと考え、次のような仮説を設定した。

### 3 研究の内容

① 道徳教育の全体計画、道徳の時間の年間指導計画作成

② 研究授業の設定

各学年で道徳の研究授業を設定し、指導案を検討するとともに、授業後に検討会を持ち、道徳教育に対する理解を深めた。また、検討会には外部講師を呼んで指導していただいた。

また、近隣の小・中学校の先生方にも参観していただき、意見交換を行った。

第1学年（9月、1月）

第2学年（11月、2月）

第3学年（7月）

③ 保護者・地域の方々との連携

校内授業参観日や市内小・中学校一斉授業公開日には道徳の授業を保護者・地域の方々にも参観していただいた。また、学校通信などで道徳の授業の様子を保護者に報せた。

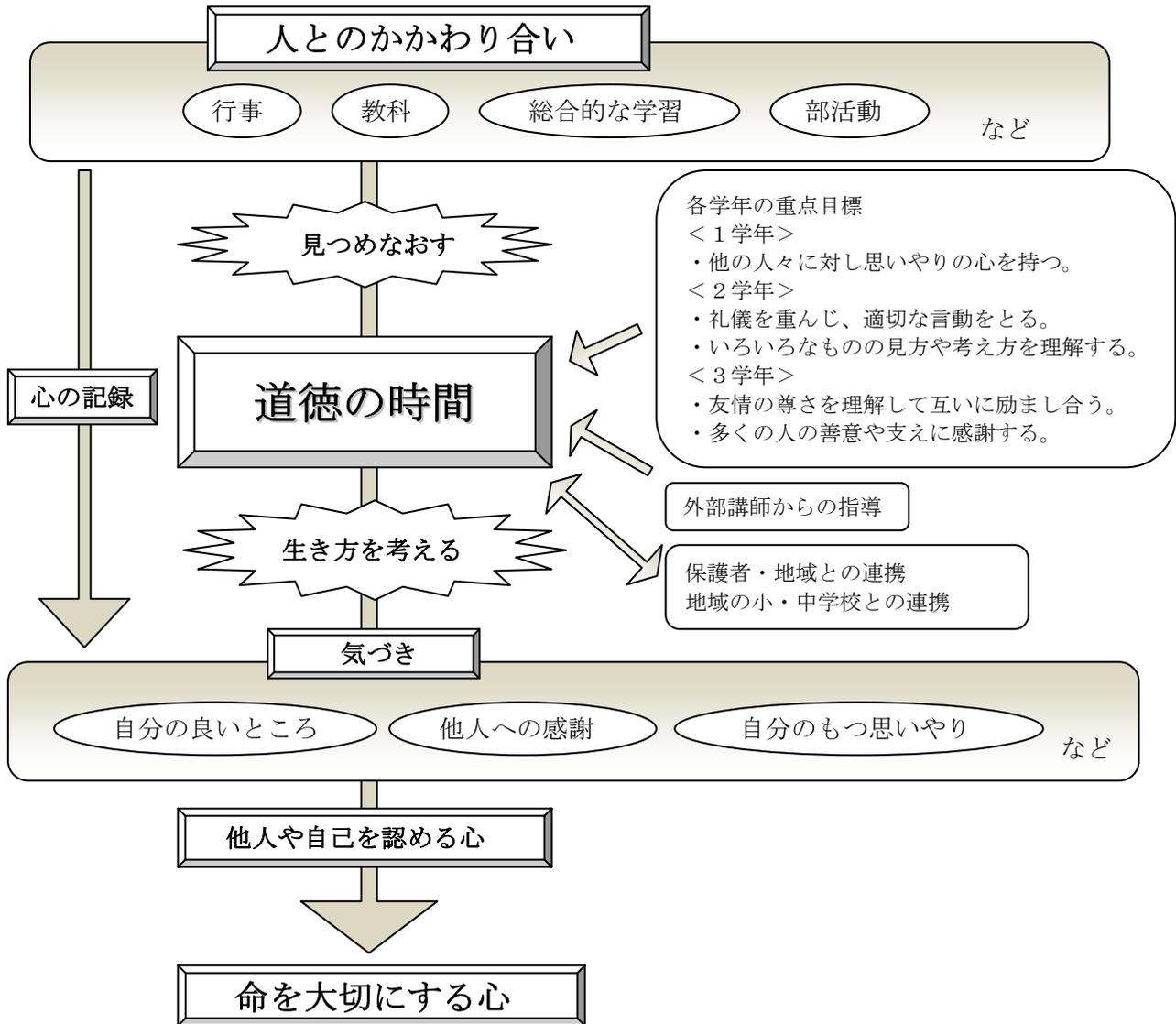
④ 「心の記録」の活用

「自分の良いところに気づいた」「いつ、誰に、何をしてもらって感謝したか」「いつ、誰に、何をしたら感謝されたか」などを記録する「心の記録」という名称のワークシートを作成し、金曜日の朝の読書タイムの時間を利用して記録した。そして、それを個人ファイルに綴じていった。

⑤ 行事・教科・総合的な学習の時間・部活動など、様々な人とのかかわりや体験活動を道徳の時間と関連づけ、実践を進めた。

⑥ 道徳の時間に、生徒が自己の体験を振り返る場を設定し、自己理解や他者とのかかわりを深めることができるようにした。

<研究構想図>



4 実践

(1) 3年生 部活動の大会を前にして

ア 主題 2-(2) 人間愛、思いやり

資料名 「大切に思うこと」

【参考HP】日本サッカー協会 リスペクト・プロジェクト「大切に思うこと」

イ 主題設定の理由

本校生徒には、個人に与えられる課題や活動には前向きに取り組もうとする姿勢が見られる。しかし一方で、集団で協力して問題を解決しようとしたり、互いの良いところを認めて意見を取り入れようとしたり、切磋琢磨したりするような場面はあまり見られない。また、自分の親しくしている友人以外の生徒とは、積極的に関わりをもつことができない面がある。

そこで、他人との違いを理解し、自分も他人もともにかけがえのない存在であることを自覚させるとともに、思いやりの心をもって人と接する態度を育てるため、この資料を選定した。

この資料は、日本サッカー協会が取り組んでいる「リスペクト・プロジェクト」をもとにしたスライド画像である。「リスペクト」の精神は、フィールドに立つ選手同士だけでなく、選手を支えるすべての人々やものを互いに大切に思うことであり、フェアプレーの精神の原点であると捉えている。この精神はサッカー界のみならず、私たちの日常生活・学校生活にも通じる。そのため、本資料を通して、自分や自分の周りの人・ものをリスペクト（大切に思うこと）する心情を養うことができ、これからの生活に感謝の気持ちをもつことができると考えられる。

中学3年生にとって、部活動の夏の大会直前のこの時期だからこそ、仲間との絆や親や教師への感謝の気持ちを育てたいと考えた。

## ウ 授業の実際

- 授業の始まりで2011年女子サッカーワールドカップでの日本代表の映像を視聴して、円陣を組む姿や必死な表情から、最後まであきらめない姿を思い出させた。生徒は興味深くスライドを見ていた。勝ったことだけでなくフェアプレー賞を取ったことにふれ、他者を思いやる心の大切さへと展開していった。
- プレーヤーが良い行為をした際に称賛を込めて示すのが「グリーンカード」であることを押さえたあと、身近でグリーンカードに値する人をカードに書いた。クラスの友人の他にも、部活動の顧問の先生や両親への感謝の気持ちを書く生徒もいた。
- 授業の終末は、部活動の夏の大会に向けて、仲間や周りの人に感謝の気持ちを持たせるように、教師の実体験を基にした話を聴かせた。授業後にもカードを書いてもよいことを指示し、書いたカードは教室に掲示した。キャプテンとして部活動をまとめる姿に感謝する言葉や友人が大きな声で応援してくれることに感謝する言葉なども見られた。

## (2) 1年生 体育大会を終えて

### ア 主題 1-(2) 目標の実現、希望と勇気、強い意志

資料名 字が書きたい

【出典】子どもが本気になる道徳授業12選(明治図書)

【参考資料】鈴の鳴る道 星野富弘(偕成社)

あなたの手のひら 星野富弘(偕成社)

### イ 主題設定の理由

生徒は、行事に意欲的に取り組む。体育大会では、学級全員で協力して練習に取り組み、目標に向かって努力することや仲間とともに励まし合いが頑張ることを実感できた。しかし、一人一人を見ると、さほど高くはない目標を設定したり、目標は立てたものの取り組みの途中で最初の決意が薄れたり、少々の失敗であきらめたりしてしまうことも少なくない。そこで、本資料の主人公のように信念をもって最後まで努力する大切さを押さえ、これからの行事につなげていきたい。



本資料は、事故で体の自由をうばわれてしまった主人公(星野さん)が、生きる喜びをなくした絶望から立ち直り、寄せ書きを書くために口で字を書くことに挑戦する内容である。何度もくじけそうになりながらも周りの支えを受け、目標を達成していく。その姿に共感していく中で、生徒が目標を実現するために、あきらめずに最後までやり通そうとする気持ちを高めてほしいと考えた。

## ウ 授業の実際

- 星野さんの行動を体験するためにペンを口でくわえて字を書いた。熱心に取り組む姿が見られた。だからこそ、主人公の大変さが理解できたようだ。
- 星野さんの描いた絵を見せたときには、「すごい！」という驚きの声が上がった。困難を乗り越えてやり遂げる星野さんの力強さが伝わったようだ。
- 「すごい！」で終わるのではなく、周りの人の支えがあったからこそ星野さんが力強く生きることができたことをこの授業のねらいとした。どのように発問すると良かったかが、今後の課題となった。

## (3) 2年生 生命を尊重する心情を育てる授業

### ア 主題 3-(1) 生命の尊重

資料名 100万回生きたねこ

【出典】100万回生きたねこ 佐野洋子(講談社)

### イ 主題設定の理由

学級の中で、親戚などの葬儀に参列したことのある生徒は半数に満たない。ペットの死を含めても、実際の死に接したことのない生徒は多い。改めて、生命の神秘性とかけがえのなさについて考えさせたい。

この資料は、絵本で100万回死んで、100万回生きたねこの物語である。授業では、「何度も生きて何度も死んだねこは幸せだったか」考えさせることで、生命の重みを考えさせたい。また、後半部分での家族ができた後のねこの言動の変



化から、生きることの意味やすばらしさについて考えさせたいと考えた。

#### ウ 授業の実際

- ・ 生徒の大半は、すでにこの絵本を知っており、教師の設問に対して、じっくりと考えて主題に迫っていくことができた。
- ・ 100万回生きたねこは、「幸せだったか幸せではなかったか」を話し合う場面では、両方の意見が出て、活発な話し合いとなった。個々の価値観がよく表れていた。
- ・ 自分の生き方とどうつなぎ合わせるのが検討課題となった。

#### (4) 1年生 生命を尊重する心情を育てる授業

##### ア 主題 3-1(1) 生命の尊重

資料名 命の値段・命の順位

【参考HP】教師のための教材研究のひろば

##### イ 主題設定の理由

「身近な人の死」を68%の学級の生徒が経験し、そのときの気持ちは「悲しい・さびしい・つらい」が90%以上を占めた。その一方、他人に対して「死ぬ・殺す」と言ったことのある生徒が77%もいる。その時の気持ちを尋ねると、「いやな気持ち」と答えた生徒は73%だが、「何とも思わない」と答えた生徒が27%もいた。幸い「いい気持ち」と答える生徒はいなかったが、これらの言葉を何のためらいもなく日常的に使っている生徒が多いことがわかった。生命の大切さを頭では分かっているが、実感としてとらえるには至っていないのが現状である。自分の「生命」を含めて、全ての「生命」は「かけがえのないものだ」という認識を持たせたい。

本資料は、がんに侵された4人の置かれた状況を知り、「1人分しかない薬をどのように分けるか、誰に与えるか」ということを生徒に考えさせる内容である。

本授業では、一人分しかない薬をどのように分けるか、誰に与えるかということを考えさせ、その判断の過程においての話し合いを通して、生命を尊重する意識を深めさせたい。

#### ウ 授業の実際

- ・ 50歳の会社社長、10歳の小学生の女の子、「若い人に薬をあげてください」と言った80歳のおじいさん、息子が中学校に入学した37歳の主婦の4人の誰に薬をあげるかを5人のグループで話し合った。

「4人全員に与える」が一番多いが、「80歳のおじいさんは、若い人にあげてくださいと言っているので、残りの3人にあげる」という意見もあった。

司会役の生徒を中心にグループで話し合うことで、全員が意見を述べることができ、違う意見に対して質問をし合うなど、活発に意見交換が見られた。

- ・ グループの話し合いの場面で、個々の意見をホワイトボードに書き、それを黒板に提示した。全員の意見が示され、それを見て気付いたことを発表することで、様々な意見があることに気付かせることができた。また、これらの話し合いをしたことについて、「どの命も大切に、順位などつけられないと思った」などの意見が出た。授業の終わりに感想を書かせ、普段の生活を想起させながら、自己を振り返らせた。

#### 5 成果と今後の課題

多くの他人への感謝の気持ちが「心の記録」に記され、他人や自己を認める心の広がりや確実な認められる。

研究授業の後の研究協議会では、グループ協議を取り入れた。各教諭が、授業を参観しながら、良い点を青い付箋に、課題をピンクの付箋に書き込みをしておく。それをグループ協議の場で、B紙の中央から良かった点を話し合いながら青い付箋を貼り、その次に課題を話し合いながらピンクの付箋をその外側に貼り、その解決方法などを話し合った。グループ協議後には、各グループの代表者がB紙を見せながら、話し合われたことを発表していった。課題となったことが、次回の研究授業に生かされるように意識をして研究を進めることができた。

今後は、適切な資料を継続して探していくとともに、道徳授業者がすぐに資料を取り出せるように、データベースを整備していくことも必要である。

